

描画体験によるバウムテストの根と地面の解釈仮説 の理論的基礎づけ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4856

描画体験によるバウムテストの根と地面の 解釈仮説の理論的基礎づけ

奥田 亮

臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究の目的は、バウムテストで描かれる根と地面について、描画体験からその解釈仮説の理論的基礎づけを行うことである。多くのバウムの根や地面の描写をなぞって、その描画過程を省察した結果、根と地面を描くことには自らの定位感と基盤感覚、根と地面の融合/分離という幹下端処理の課題、あるいは「下方に何かある」ことの暗示やそれを隠蔽・装飾する感覚、等が含まれると考えられた。そして、根と地面の解釈に関する諸テキストや先行研究を概観して、これらの描画体験との関連性を検討したところ、基本的には根や地面の描画体験がその解釈仮説を根拠づけ得ることが示されたものの、一部の解釈と描画体験に必ずしも対応しない点が見られた。その上で、根や地面の出現率は必ずしも高くないからこそ、そこにコミットして描かれたバウムはより丁寧に検討することが必要であり、本研究はそのための体験的視点を提供する意義を持つと考察された。

キーワード：バウムテスト、描画体験、根、地面、幹下端処理

I 問題・目的・方法

本論文は、描画体験過程からバウムテストの解釈仮説を理論的に基礎づけることを目的とした筆者の研究（奥田，2005；奥田，2019a；奥田，2020）の一環となる、バウムテストで描かれる根と地面に関する論考である¹⁾。一連の研究の問題意識については、上述の論文内で既に繰り返し述べており、紙幅に限りもあるため、ここでは手短かに述べておく。

バウムテストの解釈には、Koch（1957/2010）をはじめ国内外の様々な解釈テキストが用いられている。それらの解釈仮説の多くは、バウム（以下、バウムテストで描かれた木をバウムと呼ぶ）の描画特徴の発達の変化のデータや樹木・空間の象徴性等に基づいており、描画行為に関する体験的理解、すなわち描画者の内面で生じていることに基づく仮説がほとんど見られない。しかし、バウムを描く過程で起こる体験を掘り下げ考察する

ことで、解釈仮説に対して、より実感に基づいた解釈の根拠を与えられるはずである。

このような考えから、筆者はこれまでバウムの幹・幹先端処理、枝、包冠線に関わる解釈について、その描画過程で起こる体験という面から検討・考察してきた。そして本稿では根と地面に焦点をあて、それらのバウムテストにおける描画体験の過程を考察し、バウムテストの解釈仮説に理論的な基礎づけを行うことを目的とする。

根と地面の描画体験および解釈の検討は、これまでの研究同様、以下のような方法で行う。まず筆者自身や様々な人々が描いたバウム（中村（2017）や奥田（2019b）等に掲載されたバウムを活用）をもとに、その根や地面の描写を追体験的になぞることで、バウムテストにおいて、根や地面を描く過程で生じる心の動きについて省察された内容を記述する。次に、バウムテストの代表的な解釈テキストや、先行研究の中で根や地面を

扱っている論文を概観し、それらと描画体験の省察との関連を検討する。これによって、バウムテストの根と地面に関わる諸解釈仮説について、描画体験による理論的な基礎づけを試みる。

II 根と地面を描く体験の省察

様々なバウムで描かれた根を、その描画過程を想定してなぞり、そこでの体験を内観したところ、根を描く過程で、地面への根付きを描くことによる定位感や、「下方に何かある」ことの暗示、といった感覚体験が起こると考えられた。またそれに伴って、地面の描画に基盤感覚が含まれることや、根と地面の融合と分化が課題となること、地表面の処理には地面下の隠蔽・装飾感が含まれること、等も体験された。以下、これらについて詳しく述べていく。

1. 地面への根付きを描くことによる定位感

地面への根付きを描くことによる定位感とは、木が地面にしっかり立って安定するように、根を拡げ伸ばして描く過程で起こる、基盤に根を降ろす感覚のことである。このような定位感とは、幹の側線を上から下に描きつつ拡げて根元を描く過程において既に生じているが、さらに根を描いて地面に食い込ませたり馴染ませたりする中で、幹（バウム本体）を垂直に定位させ安定させる感覚が生じる（図1）。ここで述べる基盤とは、バウムにとっては自らがそこに根を張り存在する地盤・環境・場所の感覚である。その意味で根の描画

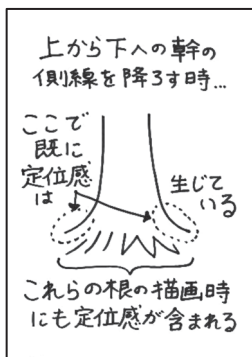


図1 根の描画による定位感

に含まれる定位感とは、環境や居場所への根付き感であり、A4の紙面にバウム（まず幹）をはじめに描き配置する時の、より空間・環境内の相対的な位置取りの定位感覚（「周囲の中で自分をどこに/どのぐらいの大きさで位置づけるか」とはまた異なるもので

ある。

2. 根付きを描くことと連動する地面の基盤感覚

根付きを描くことと連動して、地面を描く体験には基盤を確かにする感覚を多く伴う。図2左のように、地面が描かれず根を描いても宙に浮いているような描画になる。そこで図2右のように地面線が描かれると、定位される先がはっきり感じられ、基盤が確かになり、根付き（定位）感覚がより明確になる。

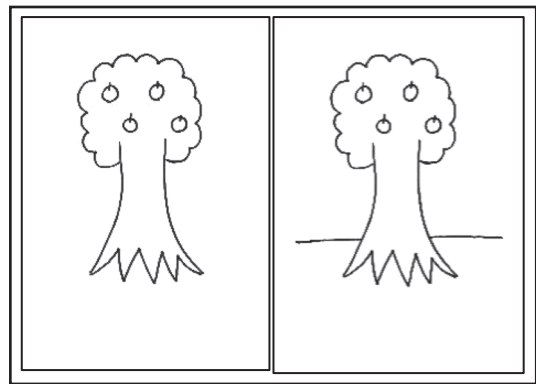


図2 地面の有無と定位感

根元が広がってそのまま地面の線に移行するバウム（図3）では、調査研究などで指標を設定する場合に、移行線を幹・根・地面のいずれとみなすか、という弁別が問題となるが、バウムの描画体験の観点から考えればその厳密な区別よりも、そこに定位の動きの生起を捉えることが重要と考えられる。

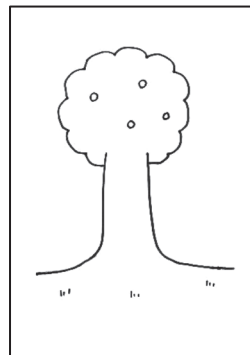


図3 幹から地面線に移行する描線のバウム

3. 幹下端処理：根と地面の融合/分化という課題

中島（2016）は幹の下端の処理様式を「幹下端処理」と呼んでいるが、本研究で様々な形態の根と地面の描画を繰り返しながら、根を地面（基盤）とどの程度融合あるいは分化させよう馴染ませる

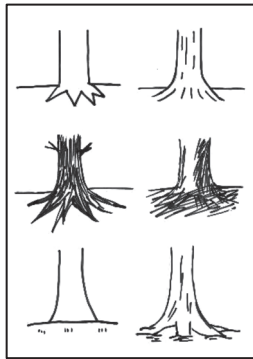


図4 様々な幹・根の融合/分化と幹下端処理



図5 幹下縁立の描画体験

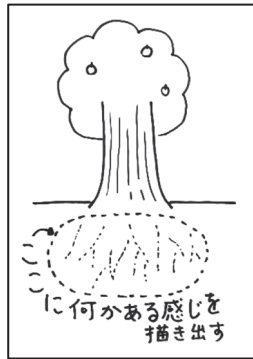


図6 “下方に何かある”感

かが、幹下端処理の一つのテーマとなると思われた(図4)。幹から根の描画がしっかりと、バウムとしての言わば個体のありようが明確に描かれるほど、地面との馴染ませ方に工夫が必要となり、またしっかりとしたバウムが根付くだけの地盤の強固さが相対的に求められる(奥田, 2019b)。これは個人に個としての意識が高まり自己確立が問題となるような際に、環境(母親・家族・共同体・社会との関係)とどう折り合っていくかというテーマを連想させる。幹を外へと展開させる境界面の処理という点では幹先端も下端も同じであるが、幹先端が展開する先は何もない空中か、枝を伸ばすならその先は樹冠内部(バウム自身の一部)であるのに対し、幹下端が展開する先は自らとは異なる、かつ自らの地盤・基盤となる対象であり、そこにその対象とどの程度融合し、どの程度分化(分離-個体化)させて描くか、というようなテーマが生じると考えられる。

ところが、用紙の下端を地面線にする「幹下縁立」の描画では、その処理があまり問題にならない。幹の根元を用紙の下端につければ終わり、そこで根付きや根と地面の融合/分離の折り合いや処理は問われない(課題とならない)のである(図5)。このような「幹下縁立」の体験的特徴は、上記の幹下端処理のテーマと併せて考えると興味深い重要な観点と思われる。

4. 根と「下方に何かある」ことの暗示

根付き感とは別の体験として、根をしっかりと綿密に描く場合、「下方に何かある」ことの表現感覚が伴うことも挙げておきたい(図6)。本来は大部分が地中であって見えない根をあえて描き出すのは、そこ(幹下の不可視な領域)に何かある感じがすることを仄めかす。ゆえに地の底へ根を伸ばして描く体験は、

自らの内面の深みを探り形にしていく心の動きを含むのではないだろうか。またバウムを描く過程では上下方向に時間軸イメージが賦活され、上方が未来・下方が過去イメージを帯びると考えられる。とすれば、根を形にして下方を描くことには、どこか過去(roots)に触れる感覚が付与されるかもしれない。ただこれらの感覚体験は、根の描画に相応のコミットがある中で生じるものように思われる。

5. 地(表)面の隠蔽・装飾感と地面線の舞台・土台感

根を描くことで下方の何かを形にしていく感覚と対応して、地面・地表面の線を引くこと、塗ること、草むらを描くことには、その下方の何かを覆う(蓋をする)・隠す・装飾する感覚も連想された(図7)。

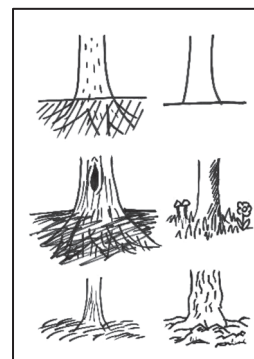


図7 様々な地(表)面の表現

ただ、地面の表層面を塗るように描く場合、基盤・地盤を確からしくするための実体感を持たせる表現との区別が難しく、また地面の表層面の質感の処理(草原のようなフサフサ感、ゴツゴツした岩のような硬質感等)は、拠って立つ場所・環境の感覚・

イメージ表現のようにも思われた。

根を描いてから地面線を描くのではなく、地面線を最初に描くという描き順で追体験をすると、地面が基盤となると同時に、舞台（ステージ）・土台を作る・準備するようにも感じられた。

以上、根と地面の描画過程の体験や、そこで生じる感覚・心の動き、あるいは描画上の/心理的なテーマの省察を試みた。次に、バウムテストの解釈でよく用いられる基礎的な解釈テキストにおける根と地面の解釈仮説と、日本におけるバウムの研究・論文を概観する。

Ⅲ 解釈テキストにおける根と地面の解釈仮説

基礎的な解釈テキストとして、Koch (1957/2010), Bolander (1977/1999), Fernandez (2005/2006; Fernandez は Stora と Castilla の考えに基づくとしている), 高橋・高橋 (2010) を参照し、各テキストにおける根と地面の解釈仮説について、類似する内容をまとめた (テキストによっては根や地面の細かな形状を指標として、その解釈を記しているが、それらの前提となる根や地面に投射される基本的な心的要素と考えられる内容をまとめた)。以下に各テキストの記述を確認し、先述の描画体験との関連性を考察する²⁾。

1. 根が「本能・衝動・無意識 (の領域)」「性衝動」等と関連するという解釈

諸テキストの根の解釈仮説群でまず見られるのが、本能や無意識といった無自覚で原始的な心の領域や衝動と関連する、というものである。Koch では“根源的性質/原始性/本能・衝動に縛られている/無意識から生まれてくる/衝動に巻き込まれたもの”等、Bolander では“本能と無意識の領域/本能的衝動/性衝動・性への反応”，Fernandez では“自我の原初性・従属性・本能・衝動・無意識を表現/攻撃性/好奇心”，高橋・高橋では“無意識の欲求や精神的エネルギーの強さと受容度”が根の解釈仮説と関連すると述べられている。

これらの解釈仮説は、先述の根の描画体験で省察した、「下方に何かあること」の暗示感覚と関

連すると考えられる。通常見えない領域にある根を描く過程に、自らのより深層にある何らかを表現する体験を含むことが、根が無意識や本能・未分化な衝動と関連するという解釈仮説の根底にあるのであろう。そこで「根が無意識的欲求や衝動を表現する」と安直かつ観念的に、実感を伴わずに解釈するのではなく、根を描く行為の中に、下方の不明瞭な領域にアクセスしようとしている体験が生じているかイメージしつつ、その解釈の可能性を考えることが重要であると思われる。ただし、通常の描画体験からは、根が性衝動や攻撃性等と関連することは感じ取り難い。解釈者の投影ではないか吟味しながら、根の描かれ方に性的・攻撃的ニュアンスがあるか、絵をよく検討せねばならないだろう。

2. 根が「過去・家族・文化への根付き」「安定性/不安定性」等と関連するという解釈

根の解釈仮説の第2のまとは、自らが過去や現実・家族・文化など、自己の時間的・社会的基盤にどう根付き支えられ、安定しているか否かを示している、とするものである。例えば Koch では“根を張ること/支えを求める/支えの脆さ”，Bolander では“過去・家族・文化などに基盤を有している”，Fernandez では“安全感/拠り所を求める/不安定性/現実との接触”との関連、高橋・高橋では“現実との接触の仕方/過去・家族・社会に根付く自我の安定性の程度”という解釈の記述がみられる。これらの解釈仮説は、根付きを描くことによる定位感と関連していると思われる。根の描画体験で指摘した、地面へ根を降ろすように描く中で根付きと安定の形成感覚が生じることが、これらの解釈における体験的根拠となっていると考えられる。あるいは、根を描く中で生じるそのような安定感に固執し拘泥することが、逆に描画者の不安定さを暗示している、と解釈されるのであろう。

3. 根が「動かなさ」「停滞」等と関連するという解釈

諸テキストの根に関する3つ目の解釈群は、Koch と Fernandez に見られる「動かなさ」を巡

る内容で、Kochでは“鈍重さ/重さ/動かすのが難しい/保守主義/停滞/阻害/ゆっくりしていること/粘液質/粘着する”，Fernandezでは“緩慢さ/抑制/不動性”等がある。これら解釈仮説は、根の描写による安定感覚が、逆に固定して動かないというイメージと繋がって生じているのかもしれない。バウムを地面へ根付けさせ繋ぎ留める描写を強調する場合には、何らかの動かなさ/動けなさの体験が活性化して描かれている可能性もあり得る。ただ今回の研究内で、多くのバウムの根を描く体験を内省した際には、動かなさ、鈍重さや停滞・抑制感が根の描画過程の中で明確に感じられた覚えはなかった。これらの解釈は、根のイメージ・象徴性や、樹木における根の機能により基づくものであるのかもしれない。

4. 地面に関する諸解釈仮説

次に、地面の解釈仮説を挙げていくと、Kochは“幹の根元の上にある地面線”は現実との距離を示し、“斜めの地面線”は“離反・反感・信用していないこと・適応の意志のないこと・不確実・支えの弱さ・意志の弱さを表す”等としている。Bolanderは、地面線に“生活している直接的な環境/環境の認知”が映し出されるとし、Fernandezでは地面は“現実感/現実の世界/適応能力/不変性/見当識/拠り所/信頼感”と関連し、高橋・高橋は“自我が現実とどのように関係しているか”を意味すると述べている。このように多くの解釈テキストでは、地面はまず「環境」「現実」「拠り所」感覚と関連すると考えられていることが読み取れる。これらの解釈仮説は、地面の描画体験が含む基盤感覚によって基づけられていると考えられる。

地面（特に幹の基部）の草や花の描画については、Bolanderは性衝動から他者の注意を逸らすための“おとり”の可能性があると述べ、高橋・高橋もまた“衝動を意識し環境との妥協を図り、その無意識の欲求を隠そうとしている”可能性を記している。これらの解釈は、地面の描画体験の隠蔽・装飾感が関連していると言えそうである。またKochは、若者が“幹の根元・根の始まりと

地面線の融合”を描く場合は“意識（自覚）の欠如・原初的な状態・客観化能力の乏しさを示す”と記している。これは幹下端の「融合/分離」のテーマと関係していると思われるが、Kochはそれ以上明瞭に記していない。

Ⅲ 根と地面に関する先行研究

1. 根に関する日本の先行研究

今度は、日本におけるバウムテストに関する研究（調査研究・事例研究など）のうち、根に関して言及されている論文・文献を概観し、それらの結果をまとめる。そして描画体験過程の省察との関連性を検討し、本研究の描画体験の各々の考察が単なる筆者個人の主観的着想ではなく、一定の実証的研究によってその妥当さが支持され得るかを確認する。

各論文の示す結果は多様であるため、根を描くことに関して1) 肯定的な心理的傾向を示唆する研究、2) 心理的傾向との関連性が見られない研究、3) 否定的な心理的傾向を示唆する研究、4) その他の研究、に分類して取り上げ、描画体験との関連を考察する。

1) 根を描くことが肯定的な心理的傾向を示唆する研究

村瀬（2011）は、樹木画において根と地平（地面）線を描いた者は社会的スキルの「関係調整スキル」が高く、周囲の環境と適応的に関る能力を有する傾向があることを、調査研究によって明らかにしている。佐藤（1978）は高齢者施設（論文では老人ホーム）在在者と大学生のバウムを比較し、前者には根の描写が少ないことを報告している。これらは、根の描画に基盤への定位感覚があることを示唆する調査結果だと考えられる。ただ、谷口ら（1981）は健常な高齢者群と若者を比較して、前者の方が幹基部や根が貧弱であることを示しており、根の描画に対する加齢の影響も考慮する必要がある。なお、後述する小沢ら（1985）による施設入居と在宅の高齢者のバウムを比較した調査報告では、根の描画には差がなかったが、地面線は在宅老人に有意に多く出現した、と

いう。

何らかの心理的問題を抱える人々を対象とした研究では、森田療法を受けて予後が比較的良好群に根の増加傾向が見られた研究(津田ら, 1979)、非行・不登校児の改善群には2~3本の根の描写が多かったという研究(一谷ら, 1984)、摂食障害者の回復例で根と地面がしっかり描かれたという事例(中村・竹内, 1987)、自閉的な統合失調症者が絵本を読む会を通じて他者への関心が高まるのに伴い、幹から根のつながりが変化した事例(三輪・野口, 2015)等がある。これらの研究も、根の描画が含む基盤感覚を有することと病理の改善の関連を示していると考えられる。

2) 根を描くことと心理的傾向との関連性が見られない研究

心理尺度と根の描写との関連性がないことを報告している研究も幾つかある。網島(1992)は短大生にYG性格検査とバウムテストを実施し、YGの得点と根を描くことに関連性がなかったとしている。調査対象を大学生として、橋本・荒木(2011)はレジリエンス尺度を、清水ら(2014)は自己愛(誇大/過敏型)尺度を用いてバウム指標との関連を調べたが、共に根の有無の指標との関連性は示されなかった。他に、5~6歳児を対象とした社会性発達尺度(岩川・岩川, 1993)、競技経験者と競技経験1年未満者のバウムの比較(近藤, 1999)でも根に関する指標では有意な結果は見られていない。病理群と健常群との比較研究では、菅(1976)が心気症患者と健常学生で「根なし」の出現頻度に有意差がなかったことを報告しているが、「基部広がり」という指標では患者群が多かった。

3) 根を描くことが否定的な心理的傾向を示唆する研究

上記の2)の研究群が、バウムの多くの指標を用いて統計的検定を行う中で根(ほとんどが根の有無)に関して有意な結果が示されなかった研究であったのは異なり、専らバウムの根に着目して大学生に心理尺度との関連性の調査を行った研究(佐藤, 2011; 鈴木, 2012)では、共に根の描

画が肯定的ではない心理的傾向と関連することが報告されている。まず、佐藤(2011)は、根の特徴的な描き方(例えば「肥大」「交差」「透過」「一線」等)は自我機能の不良さ(「対象関係」「現実感覚」「防衛機能」の低さ等)や攻撃性の高さに関連することを明らかにしている³⁾。次に鈴木(2012)は、大学生にTEGとバウムを実施してその関連性を検討している。その結果、根あり群のみに出現したTEGのパターンは、根なし群のみに見られたTEGパターンより、自我状態のバランスが悪く葛藤的であった、という。その他には、運動部所属中学生に競技意欲尺度とバウムテストを実施した村瀬(2004)の調査があり、「大きすぎる根」「広い基部」「集約した根」が競技意欲のネガティブな傾向と関連したことを示している。

根を描くことと否定的な心理的傾向との関連性を示す先行研究は、数としては多くないが、単なる根の有無を指標とするのではなく、より詳しい根の細かな描き方と心理的傾向を検討すると、適応的とは言えない特徴との関連性が示唆されるように思われる。

4) 根を描くことに関するその他の研究

その他のバウムテストの根を主題とする研究として、中園(2005)と鶴田(2020)がある。中園(2005)は大学生にバウムを描かせ、さらにその根を別紙に描かせた後に、バウムと根のイメージを尋ねている。その結果、根のイメージは「入り組み」「拡がり」「古く」「暗く」「神秘的」で「動かない」「土台・基盤」等にまとめられたという。これらのイメージ群は、根の描画体験とも繋がる内容である。鶴田(2020)は、バウムの根付きの心理学について考察し、根付きの表現に描き手の個別性への目覚めや、個別性と普遍性の相克と相即が示され得ることを指摘している。これは幹下端処理のテーマと重なる論考だと考えられる。それ以外の研究では、森田(1994)が統合失調症者は不安時に幹基部の幅が増加することを見出し、それを「不安代償指標」すなわち不安であるからこそ安定操作として根を広げて描く、と解釈して

いる。大学武道部上級生は新入生や対照群と比較して基部の広がり・根・地平が描かれたバウムが多い(青木ら, 1980), バウムの印象評定で「根付き感」が低い群はYGの「支配性」が低い(磯貝ら, 2010)などの研究もある。

5) 根に関する研究のまとめと考察

以上のように概観したところ, 臨床事例や高齢者の研究で根が描かれることの肯定的な意味合い(症状の回復や認知機能の高さに伴って根が描かれる等)が報告されており, 根の定位感がそこに関連していると考えられた。一方, 一般大学生等の健常者を対象とした調査の多くは, 根の描写と特定の心理的傾向との間に統計的に有意な関連が見られないか, ネガティブな傾向との関連性が見られたという報告であった。基本的に健常群では, 根の有無だけから何らかの心理的特徴を指し示すとは言い難く, 彼らが何らかの心理的な問題傾向・葛藤等を抱えた時に, それ(下方に何か困難があること)を暗に示すようにして, 根を詳細に描き出している(そのように心が動く)可能性があるように思われる。

ところで, 病理群や高齢者において根を描くことと肯定的な傾向との関連が見られたが, 筆者が枝の描画体験を検討し, 諸研究を概観した際(奥田, 2020)にも, 枝を描くことが特に病理群や高齢者において肯定的な意味合いを持つ(枝がないことが不調を示す)研究が多いという傾向が見られた。そこでは, 枝を幹から分化させるのに相応のエネルギーが必要なことから, 病理群や高齢者において枝の描画が心理的な機能の回復や維持を示唆するのではないかと考察したが, 根の描画についても同様のことが言えるのかもしれない。

ここで根の出現率に言及している研究報告を幾つか拾っておく。依田(2007)の研究では根の出現率は小学生で40%前後, 中島(2016)では就学前は30%に満たず, 小学生の間は20~30%台で推移している。大学生では, 例えば鈴木(2012)では43.7%の出現率である。大学生にバウムテストを1ヶ月間隔で3回実施した研究(原田, 2010)では, 39%の学生が3回とも根を描かず,

3回とも根を描いた人は全体の24%であった。研究によって根の描写の定義が異なる(明記されていない研究も多い)ため出現率が異なってくると思われるが, 根の出現率は成人で大体3割~4割程度ではないか, と考えられる。濱野ら(2007)のバウムテストの国際比較研究では, カメルーンにおける根の出現率は80%前後と報告されていることから, 文化によっては根がかなり高率で描かれ得る。一方で, 日本では根の描写は稀とまでは言えずとも描かれないことも多いため, 根がないことに特別な意味を付与し過ぎない方がよいであろう(高橋・高橋(2021)等にも同様の指摘がある)。根はなくとも(見えずとも)末広がり根元を描くことで一定の安定を幹にもたらせば良しとしているバウムも多いと思われる(中島(2016)によれば, 日本では根元が広がるバウムは児童期に発達に伴って増加し, 小学校高学年で90%を超える)。

また, 佐渡ら(2012)によるバウムの描画プロセスの調査では, バウムを根から描く人は2%であるが, 幹の片方の側線から連続して根を描くパターンは17.2%見られたという。このような描画過程も考慮に入れることは重要だと思われる。まず幹の両側線を描いてから, その下方の根の描写をする場合には, わざわざ根を描き加えるプロセスになるため, 根の描写に取り組む構えが相対的に高いことが考えられるのではないだろうか。

2. 地面に関する日本の先行研究

根と同様に, 地面(地面線)を描くことと心理的傾向の関連性について触れている論文・文献を概観したところ, 地面を描くことに関しては, 肯定的な傾向と関連するという研究結果が多く見られた。病理群に関する研究では, 統合失調症者は健常者に比べ, 地平線がないバウムが多く(斎藤, 1976), 統合失調症の陰性症状高群より低群の方が地平を描いている者が多く(横田ら, 1999), 先述した統合失調症者の絵本を読む会の事例では, 会への参加度が高まるにつれて露出した根から地面のあるバウムへと変化が見られた(三輪・野口, 2015)等が報告されている。他には, 摂食障害者

の回復事例で地面の描写が見られること（中村・竹内，1987），不登校を経験した成人は大地の線がなく，ブッシュや陰影の表現が多いこと（桑代ら，2002）が示されている。高齢者研究では，老人ホーム在住者より在宅老人の方が地平線が多く出現し（ちなみに幹下縁立は在宅女性老人に多かったという；小沢ら，1985），加齢（30～80歳代）に伴い地平が減少・消失する（ただしこの研究では，根表現による地平の暗示も含む，とされている；小林，1990），高齢者で知的精神機能が高く維持されている群では地平線の出現率が高い（坂口ら，2005）という報告がある。高齢者のみならず，幼児でも，5～6歳児で社会性発達尺度の「仕事の能力」得点が高い群は「地平線の強調」が有意に高く（岩川・岩川，1993），保育後に水遊びを長期経験した園児では「地平線」の出現率が高かった（大辻ら，2005），と報告されている。一般大学生では，GHQで神経症傾向が低い群は「地平線」の出現が多く（加曾利，2004），社会的スキル尺度の「課題対処」「葛藤処理」の高さと地平線のあるバウムが関連した（村瀬，2011），とされている。その他，短大生で「地平線あり」は「なし」よりも，YG性格検査の「思考的外向」得点が高い傾向（網島，1992），中学運動部員において「草などが木の根本を隠す」バウムの出現率と競技意欲尺度の「競技価値観」「冷静な判断」が負の相関，「計画性」とは正の相関があった（村瀬，2004），等の報告もある。

逆に，今回概観した研究の中で，地面を描くことと何らかの心理的傾向に関連が見られなかった報告は少数派で，心気症患者と健常学生の比較（菅，1976），レジリエンスの高低（橋本・荒木，2011），自己愛傾向（清水ら，2014），競技経験者と競技経験1年未満者の比較（近藤，1999）等において地面（地平）線の有無との関連がなかったという結果で，いずれも根でも有意な統計結果がなかったことを示している研究であった。

このように，臨床群や一般大学生等も含めて，全体的には，地面（線）を描くことが，心理的な不安定感や現実感，抛り所感と繋がっていると判断

できるのではないかと考えられる。一方，隠蔽・装飾感と関連するような研究報告は，桑代ら（2002）や村瀬（2004）ぐらいであり見当たらない。地面を塗ったり装飾したりする表現は，単に地面線を描くこととは異なる描画要素を含んでいるため，これらの点に関わる研究を検討する必要がある。

地面（線）の出現率についての報告をまとめておくと，依田（2007）では小学校低学年21.7%，高学年37.8%であり，中島（2016）では小学生でおおよそ2～3割前後で推移している。小学生で地面の出現率が低い一因は，幹下縁立のバウムが多いためである（中島（2016）では4割弱～5割弱）。その後年齢が上がると，地面線の出現率は医療系学生群で52.3%，看護学生群は47.5%，また臨床母親（児童精神科を受診した子どもの母親）群が22.5%，女性高齢者群が29.7%であったと報告されている（中島，2016）。臨床群や高齢者の地面線の出現率が低いのは上記の諸研究と重なるものであるが，一般学生群でも半数程度の出現率であるのは，根と同じく地面（線）が描かれないバウムであっても，根元の広がりや地面が代替（暗示）されている部分があるためだと思われる。

3. 根と地面の融合/分化のテーマと関わる研究と考察

中島（2016）は幹下端処理を分類し，その発達的な変化の調査を報告している。それによると，就学前に見られるまっすぐな根元の幹下縁立（図8左）は小学生で減少し，6年生ではほとんど出

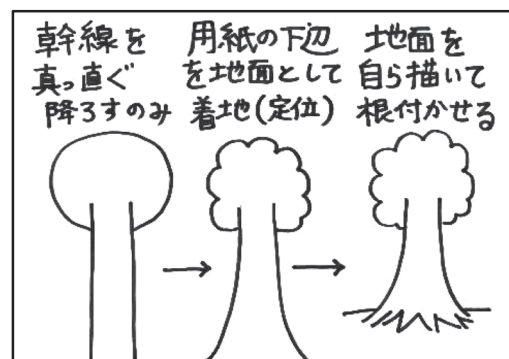


図8 幹下端処理の発達の推移

現しなくなるが、根元を広げた幹下縁立(図8中)は6年生の50%近くに見られ、その後高校生頃には広がった根元と地面線を描いたバウム(図8右)が多くなる、という推移があると考えられる。つまり、小学生までは幹下縁立のように用紙の下端を地面と見立て基盤を自ら描かず所与のものとするのに対し、中学～高校生では根と地面の両方を描く中で生じる根(自ら)と地面(環境)との融合/分化・幹下端処理のテーマの高まりがあり、発達的な課題の変化がそこに示唆されているように思われる。本論文ではここまでの指摘に留めるが、この論点については機会があれば、稿を改めてさらに詳しく検討したい。

IV まとめと本研究の意義

以上より、根と地面の解釈仮説を描画体験から根拠づけることは、基本的には一定程度可能であり妥当だと考えられる。一方で、テキストに見られる根の「動かなさ」「停滞」といった解釈は今回の描画体験の内省からは窺い難かった。また描画体験から考察された、根と地面の融合/分離のテーマについて明確に触れているような解釈テキストはあまり見受けられず、既存の解釈仮説と描画体験からの基礎づけは、一部必ずしも対応しない点も見られた。地面を始めに描いた時の舞台・土台感が基となる解釈仮説や関連する研究も見当たらず、これらについては再検討が必要だと思われる。

先行研究で示されているように、根や地面の出現率は必ずしも高くなく、本研究で様々なバウムを見て追体験的になぞった際も、根(あるいは幹下端処理)にさほどコミットしていないと感じられる描画も多数あった。それゆえなお一層、根の描写に逡巡したり注力したりして描かれたバウムや、そこで描かれた根と地面との関係は、検討するに値するのではないと思われる。根が描かれた際には、個々の描画でより丁寧に検討することが必要であり、描かれるプロセスにも注目しながら、バウム全体と照らし合わせてどのような意味を持って根が描かれているのかや、根へのこだわ

り方について考えることが重要だと考えられる。そのための体験的視点を提供することに、本研究の意義があると言えるであろう。

付記

本論文は、日本心理臨床学会第40回大会での発表内容に加筆・修正を行ったものである。

注

- 1) 一連の研究では基本的に樹木画テストも含めてバウムテストとして検討している。
- 2) 解釈テキストではないが、林(1994)はバウムの象徴性と解釈に関する論考で、根は「影」、地平は「我と汝/自己と他者/自己と環境」の関係把握・「現実吟味能力」と関わるしており、これらは本研究の根と地面の描画体験の考察と重なると思われる。
- 3) この研究は教示で根を描くことを調査対象者に指示しており、通常の施行法でバウムテストを実施した場合に同様のことが言えるかは慎重に考えた方が良いかもしれない。

文献

- 網島啓司(1992). 描画テストの基礎的研究. 川崎医療福祉学会誌, 2, 87-96.
- 青木健次・北村李軒・三好暁光・佐藤正保(1980). バウムテストの臨床的研究(第3報). 臨床精神医学, 9, 623-631.
- Bolander, K. (1977). *Assessing Personality Through Tree Drawing*. Basic Books. 高橋依子(訳)(1999). 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版.
- Fernandez, L. (2005). *Le test de l'arbre*. Collection Psych-Pocket, Editions in Press. 阿部恵一郎(訳)(2006). 樹木画テストの読みかた. 金剛出版.
- 濱野清志(研究代表)(2007). 樹木画テストの発達指標の普遍因子と文化による固有因子の抽出への試み. 平成15年～18年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書.

- 橋本泰子・荒木みさこ (2011). 大学生の自立性とレジリエンスに関する研究. 桜美林論考 心理・教育学研究, **2**, 13-20.
- 原田宗忠 (2010). 青年期における自尊感情の揺れと自己像との関係. 心理臨床学研究, **28**, 268-278.
- 林 勝造 (1994). 「バウムテスト」論考. 臨床描画研究, **9**, 3-18.
- 一谷 彊・西川 満・林 勝造 (1984). バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否 (II). 京都教育大学紀要 Ser. A, **64**, 1-22.
- 磯貝京子・森田麻衣子・磯部晶子・出原由美子・竹村百代・松本陽子・南尾由紀 (2010). バウムテストの「つながり感」「根付き感」の印象評定と対人関係との関連について. 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集.
- 岩川 淳・岩川真弥 (1993). 幼児の樹木画の研究 (1): 社会性の発達とバウム描画特徴. 信愛紀要, **33**, 77-84.
- 加曾利岳美 (2004). 神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴. 共栄大学研究論集, **3**, 106-122.
- 小林敏子 (1990). バウムテストにみる加齢の研究. 精神神経学雑誌, **92**, 22-58.
- Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3. Auflage. Bern: Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究—. 誠信書房.
- 近藤春香 (1999). 大学生運動選手のバウム画の表現特徴. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), **23**, 45-52.
- 桑代智子・郷間英世・森下 一 (2002). 不登校を経験した成人の対人関係について. 教育心理学研究, **50**, 345-354.
- 三輪幸二郎・野口寿一 (2015). 自閉的な統合失調症と絵本を読むグループ活動の試み. 心理臨床学研究, **33**, 127-137.
- 森田喜一郎 (1994). バウムテストに対する経時的な数量分析の試みの1例. 久留米大学研究論文集, **2**, 8-11.
- 村瀬浩二 (2011). 樹木画に投影される社会的スキル. 臨床描画研究, **26**, 197-216.
- 村瀬浩二・落合 優・溝口武史 (2004). TSMI 尺度得点とバウムテスト「特徴」得点との関連について. 横浜国立大学教育人間科学部紀要1 教育科学, **6**, 121-136.
- 中村このゆ・竹内和子 (1987). バウムテストによる神経性食思不振症の心的特性. 心理測定ジャーナル, **12**, 12-17.
- 中村延江 (2017). バウムテスト・キット マニュアル用作品集. 千葉テストセンター.
- 中島ナオミ (2016). バウムテストを読み解く—発達の側面を中心に—. 誠信書房.
- 中園正身 (2005). 樹木心理学の提唱と樹木画法への適用. 北樹出版.
- 奥田 亮 (2005). 本研究のねらい. 山中康裕・皆藤 章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床. 創元社, pp.144-151.
- 奥田 亮 (2019a). 描画体験から考えるバウムテストの幹の解釈に関する理論的基礎づけ. 心理臨床学研究, **37**, 363-373.
- 奥田 亮 (2019b). 100枚の日誌的バウム描画に関する考察. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, **9**, 101-110.
- 奥田 亮 (2020). 描画体験に基づくバウムテストの包冠線と枝の解釈仮説の理論的基礎づけ. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, **10**, 23-34.
- 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝 (2005). 保育における水遊びの効果に関する一考察. 京都女子大学発達教育学部紀要, **1**, 51-61.
- 小沢 真・鈴木ひとみ・坂本真理・中村紀子 (1985). 施設老人と在宅老人とのパーソナリティの比較. 心理測定ジャーナル, **21**, 20-25.
- 佐渡忠洋・鈴木 壯・田中生雅・山本眞由美 (2012). バウムの描画プロセスに関する研究: バウムはどこから描かれ, 幹はどのように構成されるのか. 臨床心理身体運動学研究, **14**, 59-68.

- 齊藤通明 (1976). 精神分裂病者のバウム・テスト. 心理測定ジャーナル, **12**, 11-16.
- 坂口守男・朝井 均・朝井 忠・大家尚文・メ崎いづみ・弓庭喜美子・岡本五百合・志波 充・郭 哲次・篠崎和弘 (2005). 地域在住高齢者のバウムテスト. 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門, **53**, 83-93.
- 佐藤秀行 (2011). 樹木画法における根の解釈仮説の検討. 臨床描画研究, **26**, 182-196.
- 佐藤清公 (1978). バウム・テストにみられる老年者の特徴. 心理測定ジャーナル, **14**, 9-12.
- 清水健司・清水寿代・川邊浩史 (2014). 自己愛傾向と対人恐怖心性がバウムテスト指標に及ぼす影響. 信州大学人文科学論集, **1**, 117-125.
- 菅 佐和子 (1976). バウムテストとロールシャッハ・テストによる自己像の検討. 心理測定ジャーナル, **12**, 19-23.
- 鈴木真吾 (2012). バウムテストにおける根の描画とエゴグラムの一研究. 健康科学大学紀要, **9**, 3-10.
- 高橋雅春・高橋依子 (2010). 樹木画テスト. 北大路書房.
- 谷口幸一・丸山 香・斎藤和子・大塚俊男 (1981). 樹木画法による老年者の描画イメージに関する研究. 老年社会科学, **3**, 179-197.
- 津田浩一・宇佐晋一・西尾 博・長尾正男 (1979). 神経症とバウムテスト. 心理測定ジャーナル, **15**, 3-10.
- 鶴田英也 (2020). 「根付き」の心理学. 箱庭療法学研究, **33**, 65-74.
- 横田正夫・伊藤菜穂子・清水 修 (1999). 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討 (第2報). 精神医学, **41**, 469-476.
- 依田茂久 (2007). 樹木画テストにおける近年の児童の発達状況の変化について. 臨床描画研究, **22**, 187-210.